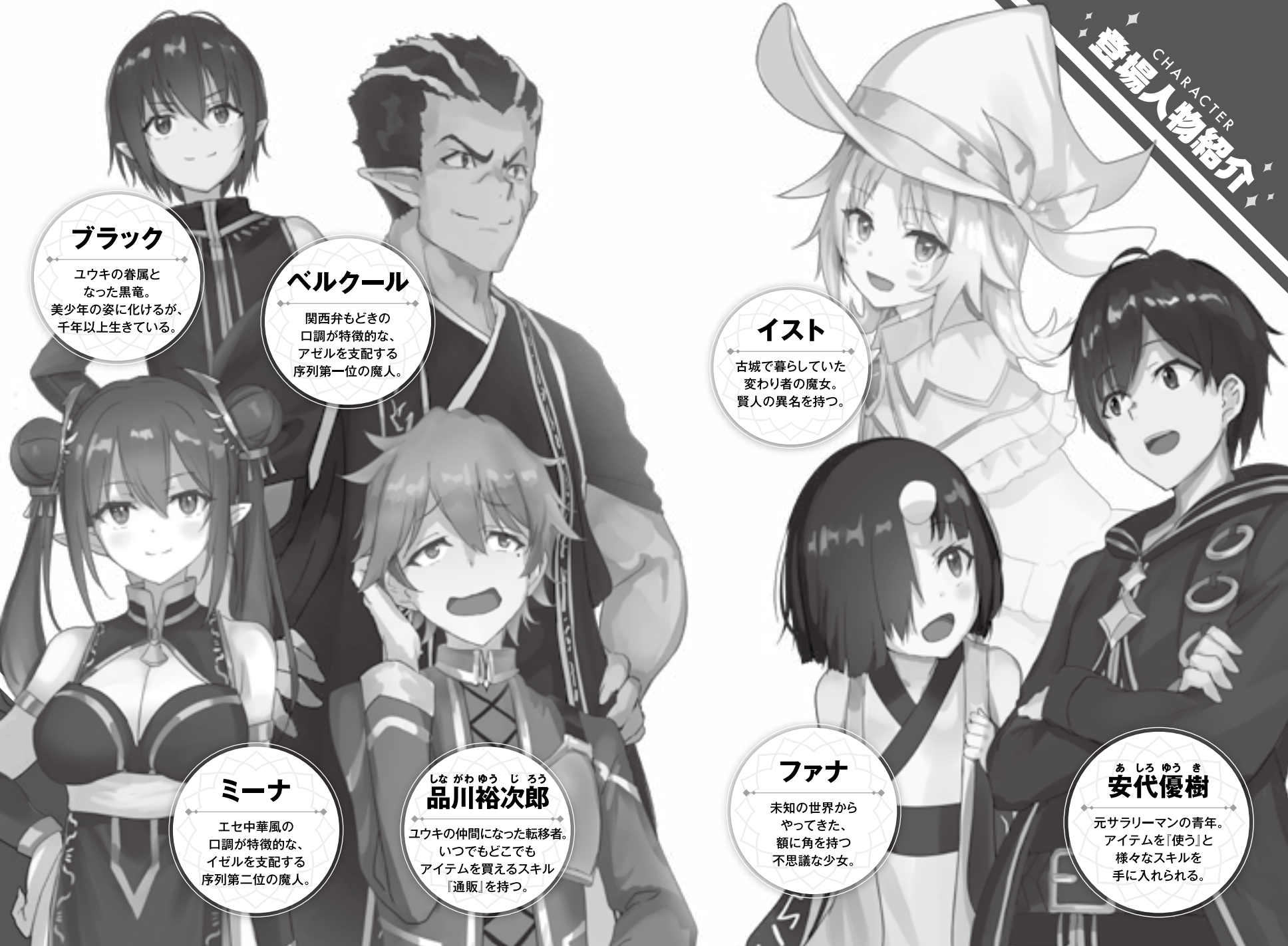
神スキル『アイテム使用』で異世界を自由に過ごします。2

雪月花
Setsugekka

Illustration
にしん

目次

第一使用　魔国同盟　7
第二使用　天命　46
第三使用　自警団　79
第四使用　魔人ソフィア　114
第五使用　魔人ミーナ　189
第六使用　魔国最終決戦　255


CHARACTER
登場人物紹介
ブラック
ユウキの眷属となった黒竜。美少年の姿に化けるが、千年以上生きている。
ベルクール
関西弁もどきの口調が特徴的な、アゼルを支配する序列第一位の魔人。
イスト
古城で暮らしていた変わり者の魔女。賢人の異名を持つ。
ミーナ
エセ中華風の口調が特徴的な、イゼルを支配する序列第二位の魔人。
品川裕次郎（しながわゆうじろう）
ユウキの仲間になった転移者。いつでもどこでもアイテムを買えるスキル『通販』を持つ。
ファナ
未知の世界からやってきた、額に角を持つ不思議な少女。
安代優樹（あしろゆうき）
元サラリーマンの青年。アイテムを『使う』と様々なスキルを手に入れられる。

第一使用▽魔国同盟

オレ、安代優樹(あしろゆうき)はこの異世界ファルタールへと召喚された転移者だ。

この世界を混乱に陥れている『六魔人(ろくまじん)』と呼ばれる脅威を倒すべく、オレをはじめ様々な転移者がオルスタッド王国の王、ガンゼス二世によって召喚された。

召喚された者には勇者として強力なスキルが与えられるのだが、オレに備わっていたのは『アイテム使用』という名前の、いかにも外(はず)れな名前のスキル。勇者としては〝使えない〟と判断されたオレは手切れ金をもらい、城を追い出されたのだが、実はこの『アイテム使用』というスキルがとんでもないチートだった。

というのもこのスキルは、単にアイテムを使うだけでなく、使用したアイテムの成分を体に取り込み、それに付随したスキルを取得するという、とんでもない代物なのだ。

その後、様々なアイテムを使用し、無数のスキルを取得したオレは、冒険者ギルドで受けたプラチナスライム退治の依頼がきっかけで、森の古城に住む魔女、イストと出会う。

彼女と出会ってからがまた、激動の日々だった。

暗黒洞窟に住んでいた黒竜ブラックを下して眷属にしたり、王国の砦を占拠した六魔人の一人を倒したり、まさに無双の活躍。中でも極めつきは、かつてこの世界を支配していた魔王ガルナザークとの戦闘だろう。この戦いで聖剣エーヴァンテインと魔王ガルナザークの魂を吸収したオレは、『勇者』と『魔王』などというご大層な称号を二つ同時に手に入れてしまった。

勇者失格の烙印を押されたオレが『勇者』にして『魔王』だなんて、運命とは皮肉なものだ。

さて、そんな日々の中で、オレはファナという一人の少女と出会った。ファルタールとも地球とも違う未知の世界にいた彼女を、オレのポカが原因でこの世界に呼び出してしまったのだ。

罪悪感もあってファナを保護することになったのだが、彼女の健気で献身的な姿はオレにとって癒しになっていった。

ところが、ファナの状態に変化が訪れる。彼女の右目には〝虚ろ〟と呼ばれる謎の黒い穴があり、どうやらこれが彼女の体を蝕み、命を危険にさらしているらしい。

そんな折、オレに取り込まれ、魂の中に寄生していた魔王ガルナザークが語りかけてきた。

奴が言うには、ある場所にファナを救う手段があるのだとか。その言葉を頼りに、オレはここ……魔国を訪れた。

そこは魔人によって支配された国であり、戦乱渦巻く魔境の地。

この地に足を踏み入れたオレ達は、早速第三位の魔人リリムと死闘を繰り広げる羽目になった。彼女は実はあの魔王ガルナザークの娘であり、オレを試す目的で戦いを挑んできたらしい。

リリム曰く、現在この魔国では三つの勢力がしのぎを削っているという。

一つは彼女の領地ウルド。一つは彼女の姉である魔人ミーナが治めるイゼル。そして、最後が彼女の兄である魔人ベルクールが治めるアゼル。

この三大勢力により常に争いが巻き起こっている状況を収めるべく、リリムは魔王の魂を取り込んだオレという存在を引き入れ、この戦に終止符を打とうと画策していた。

当然、オレはそんな魔国の戦乱に好き好んで関わるつもりはない。しかし、ファナを救う手がかりが納められた『封印の間』と呼ばれる部屋を開くには、先代の魔王ガルナザークから三人の子供達が受け継いだ封印の印が必要だという。

つまり、現在三領域を支配する三人の手からその印を奪うか、リリムのように手を組むしかない。

オレは自らが得た『勇者』と『魔王』という称号の運命に導かれるまま、否応なく魔国の戦乱に巻き込まれていくのだった。

今、オレがいるのはウルド城の会議室。

ここにはオレの他にイスト、ブラック、オレに弟子入り（？）した転移者の裕次郎、リリム、それに彼女の側近の魔物数人が集まっていた。

今後の魔国統一に向けての作戦会議である。

「それでまずはこれからどうするのじゃ？」

開口一番、イストがそう問いかけた。
会議の主題は言うまでもなく、対立するアゼル領とイゼル領にどう対処していくかだ。
「にゃははー。そんなの考えるまでもないのだー！　アゼル領かイゼル領のどちらかに戦争を吹っかければいいのだー！　以前までならともかく、今はお父様もいるのだー！　私とお父様の二人でなら、たとえベルクール兄様やミーナ姉様が相手でもなんとかなるのではないのかー？」
ガルナザークの魂を吸収したオレを父と呼ぶ、リリムのシンプルな考えを聞き、一瞬悩む。
現在、アゼルを支配する魔人ベルクールの力の序列は第一位であり、イゼルを支配する魔人ミーナの序列は第二位。更に両者にはそれぞれ、第四位、第五位の魔人が副官としてついているという。
オレが一位あるいは二位の相手をして、リリムが副官の相手をすれば、勝算はかなりあるはずだが……
「却下じゃ」
「ええー、なんでなのだー」
リリムの意見をスパッと切り捨てるイスト。
まあ、これは少し考えれば分かることだ。
「よいか。今のように拮抗する三つの勢力がある際、一つの勢力が一つの勢力に対して全面戦争を起こすのは愚策中の愚策じゃ」
「なんでなのだー？」

「たとえば、我々とイゼル領が全面戦争したとする。結果はまあ、我々が勝つかもしれん。だが、問題はその後じゃ。疲弊した我々に対し、無傷のアゼル領が襲いかかる。いくらお主やユウキがいても、魔人を倒した直後に同格の魔人達に襲われればひとたまりもない。更にお主達だけではなくこのウルドの戦力も問題じゃ。立て続けに二つの勢力と戦争をする戦力はあるまい。つまり、仮にどちらかの領土を落とせても、その直後残ったもう片方が我々と我々が奪った領土を奪い、一人勝ちになるのじゃ。故に三つの勢力の戦力が均衡を保っている内は、下手に戦を仕掛けぬこと。これは常識じゃ」
「なるほどー！　確かにその通りなのだー！　言われてみれば私以外のウルドの戦力も他の二つに負けているし、それだと全滅するのだー！　にゃはははー！」
本当に分かっているのかどうか怪しくなる笑い声を上げながら、リリムは頷く。
「しかし、そうなると現状では手の出しようがありませんな？　小競り合いでどちらかの戦力を日に日に僅かずつでも奪っていくことくらいしかできないのでは？」
と、リリムの側近の一人であるリザードマンが呟く。
「そうじゃな……大きな動きをすれば他の二つが黙ってはおらぬ。最悪なのは、アゼル領とイゼル領の魔人が手を組み、先にこちらを潰すことじゃ。これをされればウルドに勝ち目はなくなる」
イストの発言に、この場にいる魔物達が息を呑む。
確かに、オレという戦力がこのウルドに来たことでようやく、他の二つと戦力が同等なんだ。そ

れにアゼルとイゼルが気づいて協定とかを結ばれては困る。
「にゃははは、それなら大丈夫なのだー。ベルクール兄様もミーナ姉様も両方共プライドが高いので、あの二人が手を組むなどありえないのだー。むしろ、二人共お互いを潰して、それをもってこの魔国における新たなる魔王宣言をするつもりでいるのだからー」
「そうなのか？」
「そうなのだー。私は、その後に適当に処分するつもりで見逃されてるのだー。にゃははは―」
眼中にないとさらりとカミングアウトしているが……それは大丈夫なのか、リリム？
ともかく、アゼルとイゼルが手を組む可能性は低いということか。
それが分かっただけでも安心できる。
……いや、待てよ。その瞬間、ある一つの閃ぎが降りてきた。
「なあ、それって逆にオレ達ができないか？」
「？　どういうことじゃ？」
オレの発言に、イストを含むこの場の全員が奇妙な面持ちで見てくる。
「つまりさ、そのアゼル領とイゼル領のどちらかと協定を結ぶんだ。停戦条約を含む協力体制を」
「しかし、ユウキ様。それではたとえばアゼル領と組んだ場合、イゼルを滅ぼした後、アゼル領はそのまま残った我々に牙を剥くのでは？」
「それならそれで構わないさ。現状、アゼル領もイゼル領もお互いの領土を倒すべき最優先の敵と

して認識しているんだろう？　実際、オレ達もアゼルとイゼルという二つの勢力がある状態じゃ、どちらかに侵攻するなんてできない。なら、いっそどちらかに協力して二勢力の内の一つを倒した後、残った国と雌雄を決した方が早いだろう」
「ふむ……」
オレの提案に話しかけてきたリザードマンは考え込むような仕草を見せるが、それを聞いたイストはすぐさま頷く。
「儂は賛成じゃな。同盟を持ちかければおそらくどちらも頷くはず。理由はそれでアゼルとイゼルの均衡が崩れるからじゃ。そして、もう一つの理由としては相手を滅ぼした後、向こうからすれば残った我々を潰すくらい造作もないと考えるじゃろう。そこを逆手にとってうまく立ち回ればいいのじゃ」
「なるほどー！　確かにそれもそうなのだー！　侮られているのを利用するなんて思いもしなかったのだー！」
イストの説明に頷くリリム。
この会議室に集まった他の魔物達もほとんどが賛同する。
「しかし、そうなると問題はどちらの勢力と組むか、ですな」
「それなんだよなぁ。一応組むのなら信頼できる相手が好ましい。少なくともオレ達と同盟を結んでいる間は停戦条約を守る相手にしたいが……その場合、アゼルとイゼル。どちらと手を組むべき

だ？」
そうオレはリリムとリザードマンに問いかける。
これに関しては魔国に精通した者達でなければ答えられない。
アゼルとイゼルを統治する二人の魔人は、リリムの肉親でもある。
ならば、ここはリリムとそれを傍で見てきたリザードマンの意見が信頼できるはず。
「そうですね……どちらも深く物事を考えるタイプではありますが、ベルクール様はより底の見えない御方。私もあの御方の真意については未だ分からないことが多いです……」
「あー、ベルクール兄様かー。確かになー。お兄様の思考はよく分からない上に脳内ジャミングで私も心が読めないからなー。あれは難しいのだー」
「となると、やはり同盟を組むのならあの御方でしょうか」
そう言って考え込むような仕草をした後、リザードマンが告げる。
「先代魔王ガルナザーク様の子にしてリリム様の姉、『第二位』の魔人ミーナ・ミーナ様。イゼル領を治めるあの御方となら同盟関係を結べるかもしれません」
「うんうん、確かにミーナ姉様なら同盟にも乗ってくれるかもしれないのだー！」
リザードマンの発言に、隣にいたリリムは頷く。
「そのミーナというのはどんな魔人なんだ？」
「そうですね。一言で言えば真面目でしょうか。彼女は亡きガルナザーク様の意思を最も尊重した

魔人と言われており、そのために自らがこの魔国統一を成し遂げようとしています。その統一も粗野な支配などではなく厳粛な管理体制と聞きます。また仲間同士の裏切りを嫌悪するという武人のような気質も持っております。戦いも正面から堂々。このためミーナ様の配下である魔物達の結束はとても強いのです」
へえ、魔人にもそんな奴がいるのか。
聞く限りじゃ立派に王として自分の領土を管理しているみたいだな。
「ちなみにそのミーナって魔人は人間に対してはどうだ？　敵意はあるのか？」
だが、問題はここだ。
魔王の魂を取り込み、魔王の称号を持っているとはいえ、オレはあくまでも人間。それにそのミーナって魔人が人間に敵対的ならば、魔国を統一した後は必ず人間の領土にも侵攻するだろう。
そうさせないためにもまずは、ミーナの人間に対する感情を聞いておかないと。
しかし、オレの質問に対しリザードマンはなぜだか首を傾げる。
「それが……よく分からないのです」
「？　どういうことだ」
「ミーナ様は先代魔王様を慕っておりました。そのため、人間に対する復讐心や恨みの感情はおそらくあるとは思うのですが……あまりそういう部分を表に出さないタイプでして……ただ、魔人達の中でも際立って人間について勉強しておりました。人間側の知識や考え方、どういった社会構造

で、どういった歴史があったのか。現在の六魔人の中で群を抜いて人間に精通しているのは間違いなくミーナ様です。現にそうして得た人間側の知識を使い、ミーナ様は自らの領土にて様々な掟や規則を作り、それによりイゼル領は魔国にあって最も安定した領土と言われております」

なるほど。人間社会の知識を蓄えているのなら、確かに厳粛な管理体制というのも頷ける。

聞く限りこのウルドよりも、そのミーナとやらが治めるイゼルの方がよっぽど住みやすそうだ。

「というか、このウルドの管理ってどうなってるんだ？」

思わずリリムに聞くと……

「にゃははー！　基本放置なのだー！　下の魔物達は大体好き勝手させているぞー！　中層以上にはあまり勝手をしないよう注意はしてあるけれど、それ以外は放任だから、たまーに人間領土を襲いに行く連中もいるのだー」

ああ、なるほどね……

とりあえず、このウルドの管理に関してはリリムよりもオレやイストがした方がマシだな。

「お父様ひどいのだー！　私はアホの子じゃないのだー！」

とそんなことを思っていたら心を読まれてツッコまれた。

あかん。読心術を持つ奴相手にやっぱうかつなことは思えないわ。

「それで話を戻すが、そのミーナという魔人は儂らが同盟を持ちかければ、それに合意して停戦協定を結びそうなのじゃな？」

イストがリザードマンに質問する。

「おそらく可能性は高いかと。ミーナ様は合理的判断を下せる方です。我々の戦力が加われば、目下最大の敵勢力アゼルを上回る戦力となります。停戦の条約につきましても先程言ったとおり、ミーナ様は生真面目な方ですので、我々と結んだ条約を一方的に破棄することはないでしょう」

「なるほど。確かに魔国において、自らそのような法や掟を作っている者じゃ。それを破るようなことはせぬか」

「ええ、ですが一つだけご注意を。繰り返しますが、ミーナ様は先代の魔王――父上を慕っていらした魔人です。人間についての研究もあくまで敵を調べるための行為。中でも魔王様を倒した『勇者』の称号を持つユウキ殿を見た時に、どのような反応をするかは分かりませぬ。その場で襲いかかることはないと思いますが、どうか慎重に行動してくだされ」

そう言って釘を刺すリザードマン。

「どうするユウキよ？　同盟を結ぶか否か。儂はお主の考えに従うぞ」

「私も主様の決定に従います。仮に他の二勢力と正面から戦う決断をしようとも、私は主様に付き従うまでです」

「オレもユウキさんの決定に従うっす。元々ユウキさんに拾われた命っすから、オレにできることがあればなんでもやります」

「にゃははー、そういうことなのだなー。私もお父様の作戦に従うのだー」

そう言って全員がオレの指示を待つ。
現状のままではアゼルとイゼル、どちらにも戦を仕掛けるわけにはいかない。
かといってこのまま静観していては、ファナの体がもたない可能性が高い。できるだけ早く、そして速やかにこの魔国の戦乱を収め、ファナを救う。それがオレの目的なのだ。
そのためならば他勢力と手を組むことなどなんてことはないし、仮に相手が勇者を憎む魔人であったとしても、その復讐はアゼルを潰した後で改めて受ければいいだけ。
今は一刻も早く、この戦を終わらせるために最善の策を取るべし。
そう結論づけたオレは迷うことなく立ち上がり、宣言する。
「分かった。それじゃあ、イゼル領を治める魔人ミーナと会い、彼女と直接協定を結ぼう」

◇　◇　◇

「ここがイゼル領土か」
「ほえ～、すっごい高い壁がずらりと続いてるっすねぇ～。あれってまるで万里の長城っすよ」
あれからオレ達はすぐにリリムとリザードマンに案内され、イゼル領へとやってきた。
山をそのまま城としたウルドとは異なり、イゼル領は高さおよそ一〇〇メートルはある巨大な石造りの建物が地平線の彼方までずらりと並んでいる。

高さに関しては言うまでもなくウルドが上なのだが、問題は横の長さである。
というか目視できないほどにイゼルの城は広がっている。リリム曰くこの横幅こそが、イゼル領の特徴だという。
ウルドが山脈そのものを領土としているのに対して、イゼルは果てしなく長い城であり、それが領土そのもの。
攻めようにも、統治者であるミーナがこのだだっ広い城のどこにいるのかが分からないため、ある意味難攻不落の城となっているらしい。
うーむ。魔国は本当に変わった形で国を成しているんだなと感心する。
そうこうしていると、オレ達の方へと数人の魔物達がやってくる。
青白い肌で背中から黒い羽を生やした、いかにも魔族といった風貌の女性達であった。
だが、奇妙なことに全員なぜか東洋風の服――というかチャイナ服、あるいはアオザイと呼ばれる服に近い物を身に纏っていた。
「ようこそ。話は書状にて伺っております。我らの王ミーナ様に同盟の話があるとのことですが」
「ああ、オレはユウキ。現在はここにいるリリムに代わってウルドの支配者となっている。君達ならすでに分かっているかもしれないが、オレは『魔王』の称号を持っている。その上で君達の王である魔人ミーナと同盟に関する話し合いをしたい。案内をお願いできるか？」
「にゃははー、私からもぜひ頼むのだー」

オレとリリムがそう言うと、迎えの者達は懐から何やら護符のようなものを取り出して、それを地面に向けて放り投げる。
すると、そこに魔法陣が描かれ、淡い光が宙を舞う。
「この陣の中へどうぞ。ミーナ様から、皆様を丁重にお迎えするよう仰せつかっております。この転移陣は、ミーナ様がおわす玉座の間に繋がっております」
そう言ってオレ達に頭を垂れる案内人達。
予想よりも丁寧な歓迎に一瞬面食らうが、素直に従っていいものか……罠の可能性が頭をよぎる。
「だ、大丈夫っすかね～……この中に入った途端、オレら襲われないっすか？」
オレと同じことを思ったのか、裕次郎がそう呟く。
しかし、隣にいたリザードマンが即座にそれを否定する。
「いえ、それはないでしょう。今回我々はあくまで会談のためにここへ赴いたのです。向こうもそれを承知した上で受け入れています。自らが定めた法や掟を第一とする魔人ミーナ様ですから、我々から手を出さない限り、仮に協定が結ばれなかったとしても、その席で襲いかかるような蛮行はしないでしょう」
確かに、そんなことをすれば自国での信頼を一気に失う。
下手をすれば、そのまま敵国のアゼル領に戦力が流れるかもしれない。そんなリスクを冒すほど短気ではないということか。

「そちらの方のおっしゃるとおりです。ミーナ様はこのイゼルにおいて厳粛な法と秩序を生み出した偉大なる魔人様です。あなた様が『勇者』の称号を持っていたとしても、その場で襲いかかることはしないと我々が保証します」
そう言って案内人達はオレを一瞥する。
さすがに『魔王』の称号だけでなく、『勇者』の称号を持っていることもバレたか。
とはいえ、こうなった以上、ここで逃げるわけにはいかない。
相手がどのような魔人であるか、それをこの目で確認する必要もある。
「よし――それじゃあ、行くぞ」
オレの合図と共に全員が魔法陣の中に入る。
すると、一瞬体がぶれるような感覚と共に、目の前の景色が変わる。
そこは先程までの風景とは全く違う、まるで古代中国の宮廷のような場所であった。
豪華絢爛な壁や装飾、天井に施された模様は、まさに皇帝が座する玉座の間に相応しい。
芸術に疎いオレだが、これほどの華美に覆われた空間は見たことがなかった。だが、それ以上にオレの視線を釘付けにしたのは、正面に座る一人の少女。
燃えるような真っ赤な髪。きらびやかな中国風衣装を身に纏ったその少女は、この空間のあらゆる美しいものよりもなお輝いて見えた。
それはまさに天界より降りてきた天女そのもの。美しさと可愛らしさの両方を備えており、その

可憐な容姿に平伏する者すらいるほどであろう。
呆気に取られるオレ達を見ながら、少女はゆっくりとピンクの唇を動かす。
「よく来たアルな。私がこのイゼル領土を治める王ミーナ・ミーナ、アルね」
「あ、ああ、はじめまして。オレの名前はユウキ。今はこっちにいるリリムからウルド領の支配を任された魔王だ」
「なるほど、聞いていたとおりアルな。まさか本当に『魔王』のみならず『勇者』の称号まで持っているとは、な」
そう言ってミーナはオレを見定めるように鋭い視線を向ける。
さすがにオレが『勇者』の称号を持っていると一目で看破したようだ。
自らの父親である先代の魔王を倒した勇者。その称号を受け継ぐオレに対し、彼女がどう出るか。
思わず身構えるオレであったが、それに気づいたのかミーナが緊張の糸を解すように笑う。
「安心するアル。侍女達に聞いていると思うが、ここでやり合うつもりはないアル。仮にやり合うとしても正々堂々、正面から戦でやり合うアルよ」
そう言ってミーナは、会談用のテーブルに座るようオレ達を促す。
なるほど。どうやら噂通り礼節を重んじる魔人のようだ。
語尾が少し気になりはするが、これならば話し合いもうまくいくかもしれない。
「それで、同盟の話アルな」

「ああ。先に書状で伝えたとおり、オレ達ウルドは君達イゼル領と手を組み、アゼル領との戦争に協力したいと思う。無論、その間は停戦条約を結んで、アゼルを倒すまではお互いに攻撃を仕掛けない。そうした同盟を結びたいが、いかがだろうか？」
「ふむ。確かにそちらの提案は魅力的アル。現状、私達とアゼルの勢力はほぼ互角アルネ。そこにお前達の戦力が加わればアゼルといえども落とせる可能性は高いアル」
オレの提案に、魔人ミーナは考えるような素振りを見せる。
やがて、しばらく思案した後でミーナは頷く。
「いいアル。その同盟結んでもいいアル」
「本当か！　なら、早速――」
「ただし、条件があるネ」
「条件？」
ミーナからの承諾を得てほっとするオレ達であったが――
「そうネ。これを呑めば同盟を締結するアル」
「……どんな条件だ？」
ミーナからの条件に思わず構えるオレ。だが、次に告げられたセリフに思わず首を傾げる。
「私の『天命』を果たす協力をするアル。それが条件ネ」
「天命……？」

なんだろうかそれは？　オレには聞き覚えのない単語であったが、それを聞いた瞬間、リリムを含むリザードマン達の表情が変わる。
「なっ⁉　ミーナ様、正気ですか⁉　天命を果たすおつもりですか⁉」
「にゃはははは―、やっぱりタダでは同盟を結んでくれないとは思っていたのだが―『天命』とは―。さすがはミーナ姉様なのだ―。抜け目ないというか、滅茶苦茶な協力なのだ―」
「当然アル。この同盟が終われば、次に戦うのはお前達になるアル。負けるつもりはないアルが、私は万全を期すアル。この条件を満たすというのなら、お前達との同盟も喜んで結んでやるアル」
そう告げるミーナに対し、リリムを含めた魔物達は何やら悩むような仕草を見せる。
だが、オレを含めイストや裕次郎達は一体何のことかさっぱりであった。
「すまないが、魔人ミーナ。その『天命』というのはなんなんだ？」
「なんだ、お前。魔王の称号を持っているのに天命について知らないアルか？　……まあ、元々人間なのだから、そこに至るために必要な経緯を知らなくても仕方ないアルか」
オレの問いかけにミーナは意外そうな顔をしたが、すぐに解説をしてくれる。
「『天命』とはその名のとおり、その者に与えられた試練。天よりの命令アル。これは『魔人』の称号を得た者が与えられる試練ネ」
「試練？」
「そうアル。お前、なぜ私達、魔人が人間の領土を襲い、この魔国を統一するために内乱を起こし

ているか、分かるアルか？」
「なぜって……そりゃ人間を襲うのは魔人というか魔物の本能みたいなものだろう？　この魔国統一にしても自分が王になりたいからとか……」
「それもあるが一番は、魔人の上にある称号『魔王』になるためネ」
「魔王に？」
　その単語にはオレも思わず反応する。
「そうネ。魔王になるための手段はいくつかあるネ。たとえば魔人の称号を持つ者がある一定以上のレベルに到達すること。とはいえ、これは非常に難しいアル。私もそこにいるミーナもレベルはすでに２００を超えているアル。けれど、未だに魔王に到達するには足りないアル。当然ながらレベルが高くなればなるほど、次のレベルに上がるのは難しいアル。多くの魔人が人間の領土を襲い、そこにいる人間の英雄達を殺すのは、自らのレベルを上げて魔王に到達するためネ。前にお前達の領土を襲った魔人ゾルアーク、あいつがそのいい例ネ。まあ、結果は返り討ちだったみたいネ」
　そうか。あれは単なる虐殺ではなく、自分のレベルを上げて魔王に到達するのが目的だったのか。
「二つ目の方法はこの魔国の統一アル。この魔国を一人の魔人が支配した時、その魔人は魔国という領土そのものに認められ、その結果として『魔王』の称号を得られるアル。だから今、私とベルクール兄様は魔国統一のために争っているアル」
「なるほど。『魔王』の称号を得るには、レベルアップを目指すより、魔国を統一した方がスムーズか」
「けれど、魔国統一も簡単ではないアル。魔人は必ず同時期に複数現れる仕組みになっていて、これも『天命』の一種と言われているアル。つまり、レベルアップも他の魔人を押しのけて魔国を統一するのも、どちらも相応に大変ってことアルよ。けれど、この二つ以外にもう一つ『魔王』になれる手段があるネ。それが『天命』ネ」
「その『天命』ってのは一体なんなんだ？」
「要するに、その者にとって〝最も困難な課題〟。それを達成した時、その者は無条件で『魔王』の称号を得られるアル。レベルアップや魔国統一をしなくてもネ」
　マジか。つまり『天命』ってのは最短で魔王の称号を得られる試練なのか？
　しかし、ちまちまレベルアップや他の魔人を倒して魔国を統一しなくても魔王になれるんなら、皆その『天命』ってのを果たせばいいんじゃないのか？　すると、オレが考えていることに気づいたのか、ミーナが首を横に振る。
「けれど、その『天命』を果たすのは簡単なことではないアル。まず、課せられる『天命』の内容は魔人によって異なるアル。そして、全ての課題がその者に取って一番困難なものアル。魔人によっては『天命』を果たすよりも地道にレベルアップを目指すか、魔国統一をした方が早いと感じるネ。実際、歴代の魔人達の中で、『天命』によって魔王になった者は数えるほどしかいないアル」
「で、それをオレらが手伝うのが条件だと」

「そういうことアル」
こいつは参ったな。聞く限り、それを手伝うのは魔国統一以上に厄介な内容になりそうだ。しかも、それを果たせばミーナの称号は魔人から魔王に進化する。それはつまり、下手をすればあのガルナザークと同じくらいの強さになるということ。
なるほど、リリム達がごねていた理由が分かった。
条件を受け入れれば、仮にこいつと協力してアゼルを倒しても、その後オレ達は自分達で育てた最強の敵を相手にしないとならなくなる。難儀なことだ……
「どうするか？　この条件を呑むなら同盟締結アル。無論、お前達に危害は加えないアル。なんなら、魔国統一後もウルドは独自の勢力としてその存在を認めてやってもいいアル。リリムも私に歯向かわないなら見逃すネ」
「にゃははは―、さすがはお姉様なのだー。一応心を読んだけど、これマジで言ってるのだー」
それはおそらく、魔王となった自分にそれほどの自信があるということだろう。
正直、その条件で手を組むのはこちらとしては色々と不安がある。が、仮にアゼルと手を組むことにしたとしても、似たような条件を出される可能性が高い。
現状オレ達の戦力では、アゼルとイゼルにまともにぶつかるわけにはいかない。
となれば、やはり彼女と組むしかないか。
幸いというべきか、リリムが心を読んでくれたおかげで、ミーナが魔国を統一してもウルドを滅

ぼす気はないと分かったのだから。
「……分かった。その条件で同盟を結ぼう。けれど、その前に一つ。こちらも伺いたい。肝心の君の『天命』の内容について教えてくれないか？　内容次第ではオレ達が力になれないこともある」
「それなら安心するアル。これはむしろお前達でなければ協力できない内容アルよ」
「？　どういうことだ？」
ミーナの意外な一言に疑問符を浮かべるオレ達。
だが、その答えはすぐさま告げられた。
「私に課せられた『天命』の内容。それは――『人間の国に認められること』アル」
「人間の国に認められる……？　それは一体どういう意味だ？」
「簡単に言うと、その国に住む人間達に認められるという意味ネ。ちなみに何をもって認められることになるかは、具体的には指示されていないアル」
なるほど。人間達に認められること、か。
こいつは確かに無理難題だ。
そもそも、ミーナは魔人だ。
一般の人間が見たとしても、彼女が特別な力を持った異形の存在であると、すぐに気づくだろう。
その上で、彼女を人間の国において認めさせるというのは、普通に考えれば不可能だ。
現在の人間の国は、魔人の脅威に怯えている状態だ。そこに彼女が現れればパニックになるのは

必然。
まず受け入れるという第一関門がそもそも成り立つのかどうか……こいつは想像以上に厳しいことになりそうだ。
「それでどうするアルか？　協力するか、それとも同盟の話をなかったことにするアルか？」
こちらを試すように問いかけるミーナ。
とはいえ、こうなった以上は仕方がない。
「……分かった。できる限り協力するよ」
「さすがネ。では、同盟成立アル」
ミーナはすぐさま部下に契約書のようなものを持たせると、それに自らの血によるサインを記す。
するとそのサインに何やら魔力のようなものが込められ、それがミーナと結ばれたのが見えた。
「これは魔国の契約書。これに血をもって契約すれば、この契約書に書かれた誓いは破れなくなるアル。さ、お前もするアル」
契約書を見ると、オレ達ウルド領と同盟を結ぶこと、その間は互いの領土に手を出さないこと、という内容が記されている。
確認したが、他には特にあやしい一文はなかった。
念のためにリリムにサインの確認とミーナの読心をしてもらったが、何かを企んでいる様子はないとのこと。さすがにここで小細工はしないようだ。

しかし、意外だったのが契約の内容にミーナの『天命』を手伝うという記載がないことであった。
「ミーナ。これだとオレ達がお前の『天命』に最後まで協力をするか分からないぞ」
「それならそれで構わないアル。そもそも私の『天命』が本当に果たされるかどうかは分からないから、それを条件に付け加えるのはフェアではないアル。とりあえずお前の頑張りには期待するアルけど、もしもダメならその時はその時で構わないアル。それに……」
「それに？」
「……いや、なんでもないアル」
そう言ってミーナは意味深に口を閉じる。
自分の『天命』を果たすようオレ達に協力を要請しておいて、それを果たす自信がないということだろうか？
それにしては少し引っかかる言い方であった。
人間のオレ達に協力させて、それで『天命』を果たせるかどうか試す、というような感じとも違う。
もしかして、何か別の目的があるのか？
『天命』にかこつけて、オレ達と共に人間の国に行く。
そこに何らかの隠された目的があるとか……
「どうしたアルか？　その契約では不満アルか。言っておくが、これ以上はありえないほど対等な

契約のはずアルよ」
そうこうしている内に、ミーナが急かすようにオレに告げる。
……確かに、ミーナの思惑はどうあれ、今はとにかくこのイゼルと同盟を結び、一刻も早く魔国統一のために動くべきだ。
オレはそう自分に言い聞かせると、先程のミーナと同じように血による契約を行う。
「それじゃあ、これで同盟は締結アル。では、早速行動開始アルよ」
「え、もしかして、今から人間の国に向かうのか？」
契約を済ませるや否や、即座に立ち上がるミーナを見て驚く。
が、彼女はすぐに首を横に振る。
「違うアルよ。まあ、人間の国にはすぐにでも行くつもりアルが……そうなると私もお前達もいなくなって、ウルドとイゼルの守りが薄くなるアルよ。だからその前に敵を牽制しておくアル」
「牽制？」
「分からないアルか？　これからアゼル領のベルクール兄上に会いに行くアルよ」

◇　◇　◇

「にゃはははー。まさかミーナ姉様と会ってすぐにベルクール兄様にも挨拶に行くとは思わなかったのだー」
そんなミーナの発言通り、現在オレ達はミーナと共にアゼル領へと来ていた。
そこは領土と呼ぶにはあまりに奇怪な場所であった。
目の前にあるのは巨大な穴。東京ドームの倍以上はある巨大な穴が地面に広がっている。
中を覗くと底が見えないほどの深淵が広がっている。
そんな穴の壁には、無数の窓や光が点っているのが見える。
どうやら穴の周囲、壁の中に無数の魔物達が暮らしているようである。
言うなれば、ウルドが山を土壌とした天へと登るほどの領土であり、イゼルは果てしなく横に広がる領土、そしてこのアゼルは地下深く広がる無限の領土。
それぞれに異なる領土の広さを見せ、つくづく魔国における国のあり方は面白いと感心する。
「ベルクール兄上はこのアゼルの最下層にいるアル。と言っても普通の方法では最下層に行くのは難しいアルから、向こうから使者を送ってもらったアルよ」
「使者って……大丈夫なのか？　アゼルとイゼルはどちらが魔国の支配権を握るかで争っているんだろう？　そこにイゼルの支配者である君が来たら……」
「それは大丈夫アル。ベルクール兄上にはあくまでも話し合いのために来たと言っているアル。向こうもいきなりそこで決着をつけるつもりはないアルよ。それに、そのためにお前達や私、更には私が抱える『第四位』の魔人にも来てもらったアルから」

そのミーナの発言と同時であった。
彼女の背後より、小柄な少女が闇を纏いながら姿を現した。
「ふふふっ、はじめまして。皆さん」
金の髪をなびかせる少女は、ミーナとは全く異なる衣装であった。
ミーナが中華をイメージさせるチャイナ服なのに対し、少女は西洋風のドレス、それもいわゆるゴスロリと呼ばれるものを着込んでおり、手にはフリルのついた傘まで握っている。
普通なら、それほど派手な服を着れば衣装負けしてしまうところだが、少女の透き通るような白い肌と金のツインテール、更には幼いながらも不釣合いなほどの美貌を宿した顔には、まるでその服を服従させているかのように似合い、蠱惑的な魅力すら感じさせる。
「アタシの名前はソフィアって言います。こう見えて『第四位』の魔人でミーナ様の副官です。これからよろしくね。特にそっちのお兄ちゃん♪」
ソフィアと名乗った少女はなぜだかオレに顔を近づけ、耳元で舌なめずりしてくる。
その艶かしい態度にオレは思わず後ろに下がる。
な、なんだこの子。初対面のくせにえらく積極的だな。
戸惑うオレであったが、どういうわけか目の前の少女に既視感を覚えた。
初対面のはずだが、以前にどこかで会ったような感じがする。いや、正確には似た気配を知っているというか……

そんな奇妙な感覚に囚われていると……突然、背後より声がかかる。
「あー、マジでこれ来ちゃってるしー。超だるいんですけどー。っていうか、イゼルとウルド魔人が勢ぞろいしてて草ー。うち、帰っていいっすかねー」
何やら独特……というかギャルのような話し方が聞こえ、慌ててそちらを振り向く。
するとそこには、とんがり帽子に黒いローブという、いかにも魔女っぽい服装をした女性が立っていた。
銀色の髪に、ややタレ目の眠たそうな目。服の上からでも分かるほど立派な胸に、ミニスカートから覗く生足は思わず視線が釘付けになるほどの魅力を備えていた。
「えーと、君は？」
「あー、うちはベルクール様より案内役を任された魔人リアって言いまーす。一応『第五位』の魔人ってことになってるんで、そこんところよろしくーみたいなー」
リアと名乗った魔女の変わった口調に困惑するオレを押しのけて、隣にいたイストが前に出る。
「久しぶりじゃな、リア。まさかお主がこのようなところにいるとは思わなかったぞ」
「あれー？　それはこっちのセリフみたいなー。なんでこんなところにいるのー？」
「え？　イスト、知り合いなのか？」
魔人の少女に臆面もなく話しかけるイストを見て驚くオレであったが、続くイストのセリフに更なる衝撃を受ける。

「知り合いも何もこやつは儂の妹じゃ」
「い、妹ぉ!?」
「あははー、そうそう。うち、そっちのイスト姉様の妹みたいなー」
思わぬ一言に驚くオレ。
魔人の妹がいたのもそうだが、見た目的には明らかにリアの方が年上だ。
しかし、以前イストが、魔女族はある一定の年齢になれば外見の変化がそこでストップすると言っていた。ならば、見た目でどちらが年上かなど考えるのは意味がないか。
そんなことを思っていると、イストは呆れた様子でため息をこぼした。
「それにしてもリア。お主の喋り方は相変わらずじゃな」
「えー？　そうかなー？　ってかこれってうちら魔女一族に伝わる伝統的な喋り方っていうか、若い魔女達の流行語だったしー。姉様は喋り方がうざいって言って興味持ってくれなかったけどー」
「今でもうざいわ。それより、なぜお主が魔人になっておるのじゃ。リアよ」
「あー……」
イストからの問いかけに、リアは何やら困ったように頬をかく。
「っていうかー、うちら魔女族ってどっちかっていうと魔物寄りの種族じゃん。このとおり寿命は数百年あるしー、そもそも『魔人』っていわゆる称号だしー。魔物の中である一定以上の力を得た者が魔人の称号を得るなら、うちら魔女にもその資格って十分あるんじゃね？　的なー。まあ、そ

んな感じでうちはこの魔国で力を磨いている内に魔人の称号を得て、ここにいるベルクール様に拾われたみたいな感じー」
「……そうか。まあ、確かに儂ら魔女は半分魔物のようなものか……」
そう言ってイストはどこか複雑そうな表情を浮かべる。
が、すぐさまその表情を打ち消すように頭を振る。
「では、今のお主はアゼルに属する魔人ということでいいのじゃな？」
「そゆこと。でも、ここでやり合う気はないよー。つーか、さっきも言ったけど、うちは案内するだけだからー。ベルクール様もその気はないみたいだから、とりま安心していいっしょ。ってなわけで案内するからついて来てーみたいなー」
「うむ。そういうことなら案内を頼むとしよう」
「オケマルー。っていうかー、イスト姉様マジ変わってなさすぎで草ー。生真面目なところも相変わらずカワユスー。ちっこい体で抱き心地最高ー。うちの姉様マジカワユスー、スコスコー」
「ええい!?　いきなり抱きつくな！　というか誰がちっこいじゃこらー!!」
「えー、いいじゃんー。別に減るものじゃないしー。というか久しぶりの家族の再会っしょー。たくさんハグしたいーみたいなー」
「勝手に一族から抜け出した奴が何を言っておるか!?　というか放せー!!」
「まーまー、気にしないー気にしないー」

と、そんな風に騒ぐイストを抱き枕のように抱きしめながら、リアはオレ達の案内をする。
本当に大丈夫なんだろうかとオレは少し不安に思うのだった。

「いやぁ、皆さんわざわざ遠くからよう来はったなー、ホンマ毎度おおきにー。とりあえず、皆さん座って座って。ワイが、このアゼル領土を支配する『第一位』の魔人ベルクールや。いやー、どうぞよろしゅう頼んます」

何弁!?

リアに案内された先は、まるで江戸時代の城のような場所だった。

時代劇などで将軍が話すような場所に似ており、そこに座っていたのは日本の浴衣のような衣装を着た黒髪の偉丈夫。

見た目だけならば、いかにも強面な剣豪、あるいはそうした威厳に満ちた人物に思えるのだが、口を開くや否や先程の愉快な口調が飛び出し、出会って早々色んなものをくじかれた。

というか本気で何弁だよ。エセ関西弁というかなんというか……

まあ、この世界に関西弁なんてあるわけないから、それに似たような適当な言語なのかもしれないが、ミーナといいリリムといい、なんなの？　アルとかなのだーとか、魔王の子供達って全員変な喋り方しかしないの？　ねえ？

「あー、ちなみにワイのこれはアゼルに古くから伝わる喋り方や。気に障ったんなら許したってぇな。ワイ、こう見えてアゼル出身の魔物と親父殿とのハーフやさかい。親父殿のことは尊敬しているけれど母親のことも大事に想ってるねん。せやから、このアゼルに敬愛を示してこの喋り方を普段からしてんねん」

へ、へえー、つまりアゼル弁ってやつなの……？

「ちなみに私のこれはイゼル弁ネ。私もイゼルの魔物とのハーフアルよ。だから私の喋り方も由緒ある言語アル」

そ、そうなんですか……イゼル弁……

ってことはもしかしてリリムも……？

「にゃははは！　私は関係ないのだー！　この喋り方は私独自の癖みたいなものなのだー！」

あっ、そうですか。もうどうでもいい感覚で受け流すオレ。

そんなオレ達を見ながらベルクールが切り出す。

「そんでぎょうさん仲間を引き連れて何の用や、ミーナ。まさか宣戦布告でもするつもりかいな？」

「それも面白いアルね。ただ今回は警告に来ただけアルよ」

「ほぉ」

ミーナの一言に、目を細めてオレ達を観察するベルクール。

喋り方は一見ふざけているが、一瞬だけ見せたベルクールの凍えるような視線と殺気は本物であり、オレですら一瞬気圧されて思わず冷や汗が流れた。

「見てのとおり、イゼルとウルドは手を組んだアル。これだけ見れば私達の勢力はアゼルを上回ったアル」
「せやな。けど戦いは数だけやあらへんやろ。あんさんとそっちの兄ちゃんが組んだところで、『第一位』であるワイを超えられるとでも思ってるんか？『第一位』の壁はそんなに甘くはないで」
確かに数で言えばこちらの方が圧倒的に有利。
にもかかわらず、あぐらを組んでこちらを見るベルクールに対しては、不思議と勝てる気がしなかった。
仮にこの場で戦いになったとして、その結果がどうなるのかまるで予想がつかない。そんな底知れない印象を目の前の男から受ける。
「確かにネ。けれど、戦いになればアゼルもただでは済まないアル。仮に戦いに勝っても、自分の領土がなくなることをお前も良しとはしないはずアルよ。さっき自分で言っていたアルよ。アゼル領を愛していると」
「……せやな。今のお前らと戦えば、ワイの戦力もアゼルもタダでは済まんなぁ」
そう言って見えない火花を散らすベルクールとミーナ。
二人が放つプレッシャーだけでこの空間の息苦しさは増しており、オレや他の魔人達はともかくブラックやイストなどはそのせいでかなり疲労している。ちなみに裕次郎は重力に押しつぶされる

ように床でへばっていた。とりあえず回復魔法をかけておこう。
「まあ、用件は分かったわ。要はイゼルとウルドは一つの勢力になったさかい、どちらかに攻撃を仕掛ければ全面戦争の幕開けになるっちゅー話かい。せやから互いの準備が整うまではしばらく様子見をしようって提案かいな？」
「そういうことアル。私達もお前を倒すとなれば準備が必要アル。その間、無駄な小競り合いはただの消耗にしかならないアル。そこで次の決戦まで互いに戦力の強化、補強に入るのはどうアルか？　これはお互いにとってもそう悪い提案ではないアル」
現在アゼルとイゼルは小競り合いを続けているという。
それを一旦取りやめて、次の決戦に備えて互いに戦力を補強する。
そして、ミーナはその期間を利用して、『天命』を達成するというわけか。なかなかどうしてミーナも策士のようだ。
ベルクールは少し考える素振りを見せたが、すぐさまその顔に笑みを浮かべる。
「ええで。確かにこのまま小競り合いを続けても、この魔国における騒乱は終わらへん。なら、次の大戦でアゼルとイゼル、どちらが覇権を握るか勝負といこうか。ワイもくだらん駆け引きより、そうした一発で命運を決める大勝負の方が好物や」
「なら、決まりアル。それじゃあ、私達はこれにて戻るアルよ。伝えたいことは伝えたアル」
「ああ、せやけど最後に一つええか？　その準備期間やけど、まさか互いの準備が整うまでなん

て甘いことは言わへんよな？　ここは魔物が統べる魔の国。そこまでお上品なことはできへんで。こっちの準備が整い次第、仕掛けさせてもらうで」
先程までの陽気な表情は影を潜め、その奥に隠れていた魔物らしい凶暴性に満ちた笑みを浮かべるベルクール。
それに対し、ミーナもこれまで見せたことのない残虐な笑みを浮かべる。
「当然アル。もっとも、先に準備が終わるのはそちらとは限らないアルよ」
そんな妹からの返しにベルクールは愉快そうな笑みを浮かべ、「下がれ」と命じる。
そうして用が済んだオレ達は、この場より退出した。

「さて、ベルクール兄上への警告も済んだアルから、これから一度拠点に戻って準備をするアルよ」
アゼル領の穴蔵を出たオレ達を前に、ミーナがそう宣言する。
無論、準備というのは戦争のための準備ではなく、ミーナと共に人間国へ渡り、そこで彼女の『天命』を果たすための準備である。
すぐに『空間転移』を使い、一度各々の拠点に戻ろうとするが……
「あー、その前にちょっといいかなー？　うち、イスト姉様とちょっと話したいことがあるんだけど？」
オレ達が転移をしようとした時、見送りとしてついてきていたリアが声をかけてきた。

「儂にか？　一体何の用じゃ？」
「あー、それはちょっとここでは言いづらいみたいなー」
何やら気まずそうに視線を逸らすリア。
それを見てイストは何かを考えるような素振りを見せる。
「……分かった。では少し離れた場所で話そう。すまぬが、ユウキ。しばし待っててもらえるか」
「ああ、構わないよ」
そうしてイストはリアと共に少し離れた場所へと移動した。

◇　◇　◇

「して、儂に話とはなんじゃ？　言っておくがつまらぬ話なら――」
「姉様さー。まだあの人のこと追いかけてるの？」
「……」
妹からのその質問にイストは答えなかった。
だが、その沈黙だけでリアには全てが通じていた。
「例の異界の門を開く研究もまだ続けてるんっしょ？　つーか、そこまでやってあの人に会いに行く意味ってあるの？　あいつ、うちらを捨てた奴だよ。あんな奴を捜してどうし――」

「それでも儂は、なんとしてもあやつを捜したい。あやつは儂ら……いや、儂ら魔女族を生み出した元凶じゃ。一言ケジメなりなんなりつけなければ、儂は先に進むことはできぬ」
そう吐き捨てるイストの顔には様々な感情が乗っていた。
怒り、悲しみ、憐憫、そして僅かな憧憬。それらを全て理解した上でリアは頷く。
「……まっ、そだね。うちもこうして魔人になって魔国に身を置いてるのも、手段は違うけれど姉様と同じようにあいつを追い求めているからかもしれないし……」
「……」
リアの呟きにイストは答えない。
だが、答えを聞いたリアはその顔に屈託のない笑みを浮かべて頷く。
「けどま、姉様が元気そうで良かったっしょ。つーか、いつまでも一人でジメジメ暗い研究してるかと思ったら、あんないい仲間連れてて安心したしー。妹として姉様には幸せになってほしいみたいなー」
「はあ？　儂のどこが幸せそうに見えるんじゃ？」
「あはははっ、気づいてないのー？　草ー。姉様、あの人達といると嬉しそうだよー」
リアの軽口に対し、イストは小さく鼻を鳴らし背中を向ける。
そんな姉の背を見ながらリアは小さく呟く。
「……ホント安心したし……これでうちがいなくなっても、もう姉様は大丈夫っしょ……」

そのリアの表情がどこか寂しげであったことに、イストは気づかずにいた。

◇　◇　◇

【現在ユウキが取得しているスキル】
『金貨投げ』『鉱物化（龍鱗化）』『魔法吸収』『空間転移』『ドラゴンブレス』『勇者の一撃』『ホーリーウェポン』『魔王の威圧』『デスタッチ』『武具作製』『薬草作成』『毒物耐性』『呪い耐性』『空中浮遊』『邪眼』『アイテムボックス』『炎魔法ＬＶ３』『水魔法ＬＶ３』『風魔法ＬＶ３』『土魔法ＬＶ３』『光魔法ＬＶ10』『闇魔法ＬＶ10』『万能錬金術』

第二使用 ▽ 天命

あれからオレ達は一度、ウルド領に戻ってきた。
理由は無論、人間国へ向かうための準備である。と言っても必要最低限の荷物をまとめるだけであり、支度にはそれほど時間はかからなかった。
だが、出発する前にオレにはしなくてはならないことがあった。
それはファナへの挨拶である。
これからミーナ達と共に人間国へ戻るため、しばらくファナとはお別れになる。そのことを彼女に説明しなければならなかった。
ファナの体調はここ最近あまり良くなく、ずっと眠りっぱなしの状態が続いている。
無論リリムやリザードマンに頼み、ウルドにいる治療に長けた魔物にファナの様子を見てもらったが、症状が回復することはなかった。
やはり、彼女を救うにはこの国にある〝虚ろ〟の秘密を手に入れるしかない。
そのためにも、一刻も早くこの魔国の戦を終結させなければ。

そう思いながらオレはファナが眠る部屋へと入る。
「あ、パパ……」
「起きていたのか、ファナ」
そこには珍しく目を開けて、ベッドに横たわるファナの姿があった。
「……ファナ、ごめんな。オレはこれからしばらくここを留守にしないといけないんだ。けれど、すぐに戻ってくるから。そしたらファナを元気にする方法を手に入れてみせる。だから、もう少しだけ待っててもらえるか？」
オレがそう語りかけると、ファナは力ない笑みを浮かべて頷く。
「……うん、大丈夫だよ、パパ……私、パパのこと信じてるから……パパはパパにできることを頑張って……ファナも頑張る……」
「ファナ……」
そう言ってオレの手を握り、エールを送るファナ。
この子だって、辛いはずだ。
事実、今も苦しいはずなのにそれをひた隠しにし、オレに心配をかけまいと必死に笑みを浮かべている。
やっぱり、こんないい子をこんな理不尽なことで失うわけにはいかない。
オレはファナの笑顔を目に焼き付けると、必ず彼女を救うと改めて誓う。

「……それじゃあ、オレはもうそろそろ行くよ。すぐに戻ってくるから、それまで待っててくれ」
「……うん、待ってるね……パパ……」
そう言ってファナはオレの手を握ったまま、静かに眠る。
だが、その右目だけは開いたまま、底のない虚ろがこちらを見ていた。
〝虚ろ〟。これさえなんとかできればファナの命は助かる。
どんな手段を使ってでも、オレはファナを救ってみせる。
その決意を胸に、オレは眠るファナを起こさないように静かに部屋を後にする。
扉の外に出ると、そこにはイストをはじめ、ブラック、裕次郎、リリム達の姿があった。
「別れは済ませたのか、ユウキよ」
「ああ、イスト。だが、別れといってもすぐに戻ってくる。ミーナの天命を果たし次第な」
「そうじゃな。とはいえ、それがうまくいくかどうかはお主とあの魔人次第じゃな……」
「して、主様。人間国へ行くに際し、連れて行くメンバーは如何いたしますか？」
「ああ、それなんだが、オレ達の側からはオレと裕次郎で行こうと思っている」
「えっ⁉　オレっすか⁉」
思わぬ名指しに驚いた様子の裕次郎。それは彼だけでなく質問してきたブラックも同様であった。
「お、お待ちください！　主様！　このような役立たずを伴うよりも私か、せめてこちらの魔女娘を連れては……」

「いや、それだとオレの側に戦力が集中しすぎる。ウルドとイゼルは現状同盟を結んだとはいえ、アゼルは未だ敵対勢力のままだ。それにあのアゼルの大将ベルクールが言っていただろう。準備が整い次第全面戦争を仕掛けると。なら、ウルドとイゼルに残す戦力は多い方がいい。それに裕次郎はオレと同じ人間だから、人間の国に行くのならそこに馴染みやすい奴の方がいいだろう」
「ううむ……」
オレの説得に対し、不承不承ながらも頷くブラック。
それに裕次郎が持つスキル『通販』は、今回のような旅にはうってつけだ。
「というわけで裕次郎。よろしく頼むな」
「は、はい！　任せてくださいっす！　オレ、ユウキさんのためにも頑張るっす！」
明らかに緊張した様子でそう答える裕次郎。
うん、まあ、気楽に行こう。気楽に。
そう思いながらオレは残るリリムへと向き合う。
「それじゃあ、ウルドの守りは任せたぞ、リリム」
「にゃはははー！　任せるのだー！　ここにいる連中もまとめて私が面倒を見てやるのだー！」
そう言って自らの胸をドンと叩くリリム。
まあ、普段は能天気だが、彼女の実力は一度戦ったオレが一番良く理解している。任せて安心だろう。

そして、ミーナ達と合流するべく『空間転移』を使おうとするオレだったが、その時ふとある疑問が生まれた。
「……そういえばリリム。お前の『天命』ってなんなんだ？」
「うえっ!?」
気になってそう尋ねると、なぜだかリリムは奇妙な声を上げて後ろに下がる。なんだ？
「え、えっと、そ、それはだなー……あ、あはははー！　わ、私の『天命』はかなり気持ち悪い内容なのだー！　だ、だから、知る必要はないのだー！」
「？　なんだそれ。逆に気になるぞ」
「に、にゃはははは－！」
なんとか誤魔化そうと笑うリリムだが、全然誤魔化せてない。
オレ達がジト目で見ていると、それに耐え切れなくなったのかリリムが白状する。
「そ、その……『勇者』と結ばれる……という、かーなり無理難題な『天命』なのだ」
「は？」
なんだそりゃ？　勇者と結ばれる？
確かに『勇者』の称号を持つ者自体、一人存在するかどうかだろう。そもそもそれ以前に、この世界における『勇者』の使命が魔人や魔王を倒して世界に平和をもたらすことであれば、魔王になろうという魔人の彼女が勇者と結ばれるってのは、かなりの無理難題だな。

立ち読みサンプル
はここまで

しかし、偶然というべきか、『勇者』の称号はオレが有している。となると――
「それって、オレとリリムが結ばれれば、リリムの天命が果たされるってことか？」
思わずそう呟くオレ。
無論そこに深い意味はなく、ただ単にそう思ったから呟いただけなのだが、それを聞いた瞬間、リリムの顔が見る見る内に真っ赤になる。
「な、なななな、何を言っているのだーーーーーー!!」
「おわっ!?」
急な大声にびっくりする。
だが、リリムの錯乱っぷりはそれどころではなかった。
「む、無理！　無理なのだ!!　た、確かにお前は『勇者』の称号を持っているけれど……！　け、けれど！　だからといって、そういうのは私には無理なのだーー!!　私はサキュバスとのハーフだけど、そういう恋愛ごとはめちゃくちゃ恥ずかしいのだーーー!!　リリム様のキャラに合わないのだーー!!　『天命』を果たすためとはいえ、そんなお手紙や交際、デートをすっとばして、いきなりむ、むす、むす……結ばれるなんて無理ーーー!!　なのだーー!!　いくら、お前がかっこよくて強くて優しくてもダメなものはダメなのだーー!!　とにかく私の『天命』に関しては何も聞いてない！　聞かなかったということにしてさっさと行くのだーーー!!」
「あ、ああ……はい……分かりました……」